

脾湿による起床時盗汗の一例

A case report of night sweats upon waking due to spleen dampness

竹本喜典^{*1}

^{*1}タケモトクリニック

Yoshinori Takemoto^{*1}

^{*1}Takemoto Clinic

【緒言】

盗汗の病態について陰虚内熱を中心に弁証治療されることが多いが、「景岳全書」には、盗汗に陽虚の病態があることや、脾に湿が乗じて盗汗が生じることが述べられている。今回、過食と関連して増悪する起床時の盗汗に対して、香蘇散合平胃散が奏功した症例を経験したので報告する。

【症例】

42才女性。主訴：起床時の盗汗。現病歴：20代から手足汗（夏期、緊張で増悪）。32才産後頃から盗汗発症。夜間煩熱や口干はなく起床時に頸部に発汗するという。合わせて起床時に腰背部の重痛があり動き始めると気にならない。ストレス解消に間食・過食がち。腹満、便秘3日ごと。経前に易怒、甘い物が欲しい。痛経無し。月経による主訴変化なし。舌：淡紅舌、やや腫大、薄白苔中央はやや膩、舌裏血瘀なし。脈：滑弦 按有力。腹：右胸脇苦満。

【治療・経過】

肝気鬱結、陽明熱盛と考えて、加味逍遥散エキス7.5g 調胃承気湯エキス2.5gで加療開始、便通は改善し盗汗の頻度は軽減するものの一進一退で経過していた。経過中、夕食の過食で、起床時の盗汗と腰背部の重痛が増悪することが分かったため、食滞に絡んでの盗汗と考え、香砂平胃散の代用として香蘇散エキス6g+平胃散エキス7.5g 14日分（調胃承気湯エキス2.5g 便秘時頓用は継続）を処方したところ、起床時の盗汗は軽快し、腰背部重痛と手足汗についても半減した。

【考察】

陳潮祖は「治法与方剂」において“若気鬱化熱、津凝成湿、停滯少陽三焦、入睡時衛氣内帰陰分、凌晨時（明け方）衛氣由陰出陽、水津随衛氣外泄、而盗汗亦作矣！”と湿熱盗汗の病態に触れ湿熱盗汗が最も多いと述べている。また、香月牛山は「牛山方考」で宿食不消して飲食自倍の者に香砂平胃散で奇効ありと、暖気吞酸、毎夜寝汗の婦人の例を挙げている。今回の症例では脾胃の症候や湿熱と言えほどの熱状に乏しかったが、これらの病態に合致するものと考えられる。腰背部重痛も手足汗も脾湿に関連したものと言える。盗汗の一病態としての脾湿に対して香砂平胃散を活用できる。

キーワード：盗汗、病態、香砂平胃散、食滞、脾湿